

田宮昌子著

「北支」占領 その実相の断片

——日中戦争従軍将兵の遺品と人生から

〈社会評論社、二〇一五年六月、三五二頁〉

兵士にとって戦争とは重装備でひたすら行軍を続けること。中国戦線での戦争とはそういうものだと思えたのは、『麦と兵隊』の火野葦兵ではなかった。確かにそうだろうと思えるようになったのは、滇緬戦争攻防の焦点だった援蔣ルートを歩いた時のことだ。

ミャンマー中西部のマングダレーから東北の要衝で知られるラシヨーまでを、次いでミャンマーと中国の国境に位置する雲南省西南端の畹町から芒市、龍陵、拉孟を経て最前線の怒江に架かる惠通橋までを歩いた。目の前に消えては現れる果てしなき山並み。全行程は車だったが、簡単な旅ではない。その時、よくぞ日本軍兵士は、こんな遠くまで歩いてきたものだと思いき、深く考えさせられた。延々と繰り返され

る行軍、小休止、行軍、大休止の果ての戦闘……。いつたい兵士は、どんな日常を送り、戦争をどう捉えていたのか。

この本で著者は、父方の伯父に当たる田宮圭川、その部下であった山本泉、山本の戦友で「戦後の肉體文学作家として知られた」田村泰次郎——三人の三重県人が残した膨大な写真と遺品を随所に配し、克明な現地調査を交え、占領地の当時と現在の変化を追い、兵士らが過ごした占領当時の「北支」での日々を描き出す。まるで細密画のように。

行間に浮かびあがるのは硝煙の臭い、哀切極まりない血腥さ、凄惨な戦闘といった非日常の世界ではない。著者は戦場という非日常空間で営まれる兵士らの日常から、改めて戦争とは何かを考える。温かく冷静な視線で。

先ず著者は三人が交わった占領地の山西省孟県に足を運び、「北支」占領」の日々を解き明かそうとする。やや四角張った表現では日本側国家権力と占領地住民との最前線——占領と抵抗の接点における日常を切り取り、占

領地での中国人との日々の交わりを描いた後、「対日協力者」たちが歩んだその後の人生を聞き取り、書き留める。

次いで「禅寺に生を受け、仏教者を志し、儒学を学」んだ教員が召集され、郷里で入営し、江南での初年兵訓練を受けた後に現地部隊に配属され、将校となるべく帰国し、豊橋陸軍教導学校（現愛知大学豊橋キャンパス）での幹部候補生訓練を経て「北支」に派遣され山西省での軍務を送り、やがて沖繩への転属を命じられ激戦のなかで玉砕した下級将校・圭川を、「北支」占領の担い手」の一人として捉え直す。

最後に遺品写真、従軍記念品、当時のスクラップ記事の分析を通じ、「時代の論理と個人の意識」に焦点を当て、「北支」占領の内側」でながら生きていたのかを静かに語る。

ありふれた日本の男が、ありふれた人生のなかで立つことになった「北支」占領」の現場——そこから、著者は戦争の「実相」を解き明かそうと試みた。戦争論として秀逸だ。（樋泉克夫）